

悪い夏悪い旅

五木寛之

青年は荒野をめぐす



五木寛之

青年は荒野をめざす

青年は荒野をめざす

五木寛之作品集 3

1972年12月20日第1刷

1974年11月30日第9刷

著者／五木寛之

発行者／樫原雅春

発行所／株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町 3

電話（代表）03-265・1211

印刷所／凸版印刷株式会社

製本／大冢製本印刷株式会社

© 1972 Hiroyuki Itsuki

Printed in Japan

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

五木寛之作品集第三卷／目次

青年は荒野をめざす

悪い夏 悪い旅

解説 植草甚一

297 251 5

青年は荒野をめざす

装幀／養老正也

レタリング／原アト・アクチュアル

カバー・表紙カット／エドワルド・ムンク「叫び」より

青年は荒野をめざす

△一九六七年三月～十月雜誌連載▽

第一章 霧のナホトカ航路

1

ソ連極東船舶公団船バイカル号は、今、船体をかすかに震わせながら、出航を待っていた。

晴れた五月の真昼だった。乾いた初夏の陽ざしが、軽快なシンバルの連打のように海面を叩いている。海のほうから、潮の匂いを含んだ強い風が吹いていた。

「あと五分で船が出るわ」

「おーい、テープを投げろ！」

「さらば、日本よ、だ。ざまあみろ」

バイカル号の甲板では、若い船客が陽気な叫び声をあげていた。日本人が大半で、外国人がその間にまじっている。

横浜港棧橋は、見送り人でいっぱいだった。数百本のテープが、彼らとバイカル号を結んでいた。原色の紙テープは、鋭い弧を描いて絶えず乗船客たちのほうへ飛んできた。バイカル号は、まるで七色の紙テープで棧橋につながれているように見えた。

「さあ、動くぞ！」

誰かが叫んだ。

「ジャスト十二時だ」

音楽がかかった。バイカル号のバンドは、さっきからアップテンポの「ヘカチューシャ」をやっていた。マーチふうの陽気な演奏で、出航の興奮を盛りあげていたのだ。それが急にかわった。感傷的なへともしびのメロディが、トランペットのリードで流れた。

「夜霧のかなたに、別れを告げ——」

と、船客の若い女の子がソプラノで歌った。調子外れの男たちの声が、その後をつける。

「——雄々しきますらお、いでて行く」

汽笛が鳴った。栈橋の人々が手を振った。バイカル号の船体は、静かに岸壁をはなれた。テープがのびきって切れ、ゆるやかに海面に舞い落ちる。離岸し、後進し、栈橋から離れたところで、船は大きく船首をたてなおした。かすかにゆれながら、加速する。風が冷くなった。音楽がやんだ。五千三百トンのソ連客船バイカル号は、いま横浜港を出て、シベリアの玄関、ナホトカへ向かうとしていた。

「船の出発って、いやね」

背中のほうで若い女の声が出た。「だって、なんとなく感傷的になってくるんだもの」

ジュンは首を回してふりかえった。彼のうしろに、知らない娘が立っていた。髪の毛の長い、陽に灼けた少女で、ふちの白い大きなサングラスをかけている。

ジュンは少しどぎまぎした。その娘の格好が気になったのだ。ボタンダウンの男もののシャツに、ぴっちりしたヒップボーン・スラックス。縞シャツの裾を、バスト

の下までたくしあげて結んでいる。焼きたてのパンのよ
うな腰のくびれをむきだしにして、彼のほうを見ていた。
どこか野生の小動物のような感じのする娘だ。大きなサ
ングラスをかけているので、年齢はよくわからない。

「さつきはどうも」

その娘はサングラスをはずしながら言った。「おかげ
で助かったわ」

「なんだ、きみか」

乗船のとき、荷役会社に頼んだ荷物が届いてないと泣
きだしかけていた娘だった。ジュンが階段の裏にあった
のを、見つけて運んでやったのだ。

「サングラスなんかかけてるから、わからなかった」

と、ジュンは言った。「おまけに、そんな格好だし——」

「あたしは水森麻紀。あなたは？」

「ぼくは北淳一郎。面倒だからジュンでいい」

「どこまで行くの」

「行けるところまで行くんだ」

「ヒッチで？」

「まあね。ソ連圏内はだめらしいが」

「何しに行くの？」

「さあ」

ジュンは首をかしげて、また船尾の手すりに体をもたせかけた。目の下で、スクリュューにかき回された水面が、もりあがって見えた。

へおれは何をしに外国へ行くのだろう

と、彼は考えた。それは簡単な答のようでもあり、また複雑な質問のようにも思われた。

ジャズ。大学。人間。生活――。

そんな言葉が頭の中に、きれぎれに浮んでは消えた。

「あたしはサンレモの音楽祭に行くの」

麻紀という娘が言った。ジュンは驚いて彼女の顔をみつめた。

「歌うのかい？」

「もちろん」

「水森麻紀なんて聞いたこともないぜ」

「でしようね」

彼女は澄ましていた。「でも歌うの。本当よ」

ジュンは鼻の上にしわを寄せて笑った。彼が相手をか

らかう時によくやるやつだ。

「ぼくはナホトカ回りでアメリカに行くんだ。ニュー・ボートのジャズ・フェスティバルに出演するのさ」

水森麻紀が不意に怖い顔をしてジュンをにらんだ。

「あなた、あたしをからかっているのね」

「どんなでもない。ぼくは本当にニュー・ボートのステージに出るんだよ」

「本当に本当？」

「本当に本当だとも」

「何をやるの？」

「トランベットのソロ」

「嘘つき！」

「お互いさまだ」

彼女は、ふちの白い大きなサングラスを、ゆっくりと顔にかけた。おへそのあたりがビクビクと引きつった。

「けちくさい考えしか持てない人ね」

と、彼女は言い、くるりとうしろを向くとゴム草履をビタビタ鳴らして離れて行った。

お尻がずっとあがって、高いところについている。

ヘボーイング 727 みたいだ」

と、ジュンは思った。へちよつと誇大妄想の気があるけど、悪い子じゃない」

船がかすかに揺れはじめた。海の色が暗くなった。バ
イカル号は、房総半島を左手に見て、太平洋へ進んでい
た。明日は津軽海峡をぬけて日本海へ出る。横浜を出て、
五十三時間後にはナホトカだ。

ヘナホトカにジャズをやれるところがあるだろうか」と、
ジュンは考えた。

外国へ行こうとジュンが考えたのは、昨年の一月、彼
が高校三年の時だった。

朝がた雪がちらついて、ひどく寒い日だった。ジュン
はダークグレイの厚手のダッフルコートを着て、新宿を
歩いていた。左手に参考書を入れたカバンを、右手には
トランベットの黒いケースをさげていた。

ジュンは新宿のジャズ・スポットヘイバー・ムーン
からの帰りだった。ジュンは日曜日ごとに、その店のコ
ンポに加えてもらって、吹いていたのである。

日曜の夕方、六時過ぎで、新宿の街は相変らず混んで
いた。空は暗かったが、ネオンのせいで舗道は明るかった。
ジュンは人の流れに押されるようにして、ぼんやり歩
いていた。彼は今日、ヘイバー・ムーン」のマスター
に言われたことを、さっきから考え続けていたのだ。

「お前さんには、何か欠けてるものがあるんだよ」

と、顎ひげを生やしたマスターは言ったのである。

「それがなんだってことは、おれにもわからん。だが、
何かが足りんということは確かだ。そりゃあ、お前さんの
才能は大したもんさ。テクだって凄い。何しろ基礎から
みっちり叩きこんでるからな。こないだ、お前さんが何
気なく「熊蜂の飛行」のさわりを吹いてるのを聞いて、
おれはぶったまげたね。あんな曲芸的演奏をらくらくや
れる素人は、そうざらにはいないぜ。そうだとお前
さんのベツトには、ちゃんとしたイントネーションって
ものがある。スタイルも、フレージングも、アタックも、
いちおうできている。だが——」

「わかってるよ」

ジュンは壁際のボックスで、うなだれて呟いた。

「ぼくのトランペットはジャズになってないんだ。ハイ
ドンのトランペット・コンサートや、シベリウスの第二
は吹けても、ブルースは吹けない。吹けないんじゃない
で、ブルースにならないんだ。だから外の連中にいやが
られるんだ。だが、なぜだい？　なぜぼくが吹くとジャ
ズにならないんだらう？」

グラスに水を注ぎにきたミニ女史が、くすりと笑った。
ミニ女史はマスタ―夫人で、十年前からミニ・スカートの
愛用者だった。ジュンの頭を指先でこづいて、囁くよ
うに言う。

「あなたの演奏はちゃんとジャズになってるわよ。ただ、
竜ちゃんたちのジャズと、種類がちがうんだわ。それだ
けよ」

「どっちがうって？」

「竜ちゃんたちの音は、濁ってるの。人間のいやらしさ
や、馬鹿さかげんや、憎しみや、くやしきや、そんなも
のがどろどろになって内にこもってる音よ。だからいい
の。あなたのは、そうじゃない。音がきれいな過ぎて、こ
っちに共鳴させるものがないわ。鑑賞用演奏なのよ」

「もういいよ。聞きたくない」

ジュンはポケットから百円銀貨を二つ、伝票の上にお
いて立ちあがった。「どうせ、ぼくは駄目なんだ」

そのジュンの肩を、誰かがおさえた。

「どうした？　また議論かね」

プロフェッサー・島木の声だった。一九二〇年代を思
わせるダブルの背広に、変色したソフト帽。膝までとど
くマフラーと、虫くいだらけの外套。真白な長髪の下に、
老いたダチョウのような顔がある。以前は大学教授だっ
たと噂されている奇妙な老人だ。曲名もブレイヤーの事
も、全く知らないくせに皆から一目おかれていた。ジャ
ズを聞く格好が、実にサマになっていたし、妙に含蓄の
あるような意見を吐くからだ。

「ぼくの演奏には何か欠けてるらしいんです。いった
いなんだと思いますか？」

「ふむ。それはスイングがないんだらう」

「スイング？　ぼくのペットは充分スイングしてると思
いますよ」

「勤ちがいしちゃいかん」

プロフェッサーは微笑した。それからパイプを出して右手に持った。ミニ女史が顔をしかめた。プロフェッサーが得意のポーズを取ると、話が長くなるからだ。

「スイングとは何か。それはアンビバレンツの美学である。アンビバレンツ、つまり二つの対立する感情が同時に緊張を保って感覚されるような状態の中で、激しく燃焼する生命力がスイングだ。愛と憎悪、絶望と希望、転落感と高揚感、瞬間と永遠、記憶と幻想、それらがスパークする所にスイングが生まれる——」

プロフェッサーは満足気にみんなを見回した。マスターもジュンも黙っていた。ミニ女史は逃げて行ってしまった。

「飛躍し乱舞するもの、つまりメロディーはベルグソンのいうエランビタールであり、拘束し規制するリズムはいわばフランビタールの現れだといっていい。ジャズというやつは、つまり、その両者の対立の美学なのだ」

「だからどうなんです」

と、ジュンが口をはさんだ。「ぼくに欠けているのは、なんですか？」

プロフェッサーは、しばらくジュンの顔をみつめていた。それから小さな声でぽつんと言った。

「あんたは苦勞がたりんのだよ」

「苦勞？」

「あんたの顔を見てると、大体わかるな。あんたの両親は健在だ。あんたは自分の勉強部屋もっている。あんたはこれまで飢えたことはない。寒さで眠れなかったことも、盗みをしたことも、他人を殺そうと思ったことも、殴られたこともない。学校の成績もいいほうだろうな。

つまり、君は幸福すぎるんだよ」

マスターが横から口をはさんだ。

「じゃ、先生、幸福な人間にはジャズはやれんというわけですか？」

「いや、必ずしもそうじゃない。だが、ジャズは、ボクシングと同じだ。あれはハングリー・アートなんだ。不幸でなくてもいいから、不幸のなんたるかを実感もってわかる人間じゃないのかん。つまり、苦しんでいる人間との連帯感の有無が問題であるような——」

ジュンが静かに立ちあがった。

「ぼくは帰ります」

「ジュン、気にするな。おれたちはお前さんを攻撃して
るわけじゃないぜ」

「なぐさめてもらわなくてもいいんです、マスター」

「ジュン君」

と、プロフェッサーが呼びかけた。

「心配しなくてもいい。いずれ君も、いやというほど不幸を味わうことになるさ。また不幸を持たぬ不幸というものもある。そうでなくても、今、君は独りぼっちでとても苦しんでいるはずだ。時間だよ。時間がたてば、そのうちちゃんと君のジャズもスイングするようになるさ」

「ありがとう」

「ところで、わしのコーヒー代も払っておいてくれんか、ジュン君」

とプロフェッサーが言った。

「ええ。いいですよ」

「すまん。いつも」

ジュンは、もう二百円払ってヘイバー・ムーンンを出た。独りぼっちで、ひどく自分がつまらない人間に感

じられた。彼は夜が迫ってきた新宿の街を、肩をすくめて歩いていった。

ヘジャズ・カントリーンという小説の中に出てくる少年の気持が、彼にはよくわかるような気がした。その少年は、自分がハーレムの黒人の家に生まれなかった事を残念に思うのだった。黒人の哀しみが理解できなくては、本当のジャズはやれないと信じこんでいたからだ。

へおれの家は決してブルジョアじゃない

と、ジュンは思った、決して金持ちでもなんでもない。ただ、平和で安定した中流家庭だった。それは本当だ。ジュンは、これまで寒さで眠れなかった夜も持たなかったし、飢えて泣いた記憶もない。

竜ちゃんは質入れた楽器を流さないために、血を売って利子を払ったそうさ。それがどんな事か、ジュンには想像はつく。だが、想像だけでは駄目なんだろう。

へ自分はもっと苦労しなければいけないんだ

と、ジュンは夜の新宿をさまよいながら考え続けた。

ジュンは三月に高校を卒業した。商事会社の課長をや

っている父親は、ジュンのために手持ちの株を処分して大学への入学準備をととのえてくれた。

だが、ジュンは、受験した大学の全部に失敗した。

「どうしたんだい、ジュン」

と、父親はある晩、ジュンを書斎に呼んでたずねた。

「お前、大学に進む気がないのかね」

ジュンは黙って唇を噛んでいた。

「私は、お前の能力はほぼ見当がついているつもりだ。

国立の一期校のほうは失敗しても、A大に落ちるとは信じられん。ジュン、どうして私に率直に自分の考えを説明してくれんのだ。私はお前が航空自衛隊に行くと言いつ出したとしても、驚きはしないだろう。私自身、家業の医院をつぐ気がなくて、商社会社の海外駐在員になった男なんだからな」

ジュンは、しばらく答えなかった。それから、この数カ月、考え続けていた事を父親に話しはじめた。

しばらく家を出て独立して働いてみたい、そして人生とは何かということを独りで考えてみたい、と彼は言ったのだ。

「そうか。やっぱりな」

と、父親は腕組みしてうなずいた。「私に言わせれば、

お前の考えは一種の傲慢だという感じもある。大学へ進みたくても進めずに働いている青年も多いのだ。彼らから見れば、お前の考えは鼻もちならん俗物根性のように思えるかも知れんぞ。それを覚悟で働いてみるなら反対はせんよ。母さんのほうは私がなんとかしよう」

「この話には、もう一つおまけがあるんだけど——」

と、ジュンは言った。「ぼくは働いて十万円だけ貯めたら、外国を放浪してみたいんだ。そして、いろんな国の、いろんな人々の生活を見てみたい。世界中の民族の生の感情や、音楽を、じかに自分の目で確かめてみたいと思うんだけどな」

「自分の力でやれるなら、文句は言わんよ」

と、父親は苦笑して言った。「だが、そんな事は夢物語さ。たった十万円ですこまで行けると思う」

しかし、ジュンにはひそかな計画があったのだ。ナホトカ航路のソ連船を利用して行けば、北欧のヘルシンキ